

九州・柳川市×景観まちづくり＝ 新たな川づかいを起点に ローカル・インフラツーリズムの開発

五三 裕太 (いつみ ゆうた)

山梨大学 大学院総合研究部工学域
土木環境工学系 助教



① 掘割のまち柳川で川下りを楽しむ参加者
② 1日目は水門と掘割を見学する ③ 遊びの実践前のアイデア交換



福岡県柳川市で、川の新たな使い方を考える合宿式ワークショップが行われた。
背景にあるのは掘割や水門など地域の暮らしに根ざしたインフラを楽しみながら知る

「ローカル・インフラツーリズム」の開発を目指す研究プロジェクトだ。

参加者は泥遊びや掘床レースを通じて、見慣れた水辺の価値を捉え直し、未来の川づかいの種を探った。

水郷・柳川で「川づかい」考える

江戸時代に城下町として栄えた水郷、福岡県柳川市には、網の目のようにはりめぐらされた掘割（水路）に当時の面影が残る。新緑が水面に映るなか、掘割や川の新たな「使い方」を考えるワークショップ（WS）「<川づかい>クリエイティブ・キャンプ in 柳川2026」が開催された。これは、山梨大学の五三裕太さんが取り組む「福岡県柳川市における水門を活用したローカル・インフラツーリズムの開発」プロジェクトの一環で、2026年5月16日から17日にかけて合宿形式で行われた。参加者は九州や関東の大学生・若手社会人、柳川市民、プロジェクト関係者、ゲスト講師など21名。1日目は柳川の掘割や沖端川周辺を歩き、川や掘割、水門を観察するところから始まった。2日目は前日の体験をもとに川や掘割の新たな使い方を実践、さらに公開討論会ではこれまでプロジェクトに関わってきた柳川暮らしつづ会や柳川市役所観光課の方も加わり、アイデアを共有、発信した。

水門を、管理対象から地域を知る入口へ

主催者の五三さんは、自然や文化を生かした暮らしの環境やその体験をデザインする景観まちづくりを専門とし、「川というものの、景

観まちづくりに対する可能性を追求してきた」と話す。柳川での研究は偶然の出会いから始まったそうだ。2024年4月、九州大学に赴任した際、以前の研究を通して知り合った方のご縁で、柳川の乗富鉄工所の社長と出会う機会があった。同社は水門など水のインフラ関連施設を手がける柳川の企業だ。その乗富社長から「柳川で何かできないか」と声がかかり、水門を地域の水の歴史や暮らしを読み解く入口として捉え直す構想が生まれた。柳川には1000を超える水門があり、地域の人々が管理してきたが、近年は担い手の高齢化による省力化やシステム化が課題となっている。五三さんは、水門を単なる管理対象ではなく、水を分かち合い、守ってきた歴史を伝える存在として捉えた。地域の暮らしに根ざした小さなインフラを、地域の人も外から来た人も楽しみながら知る。その仕組みを、五三さんは「ローカル・インフラツーリズム」と位置付ける。そして、掘割や水門などの水環境に地域の人々が見いだす役割や価値を、水門との関係から可視化し、維持管理の実態とあわせて共有する仕組み、すなわち「ローカル・インフラツーリズム」を構築することをプロジェクトの目的とした。

助成と協働で動き出した構想

プロジェクトは①地域の水環境認識の把握、②水門操作と水環境機

能の調査、③水門まちあるき企画の実践とローカル・インフラツーリズムの提示の三段階からなる。インタビュー調査や座談会形式のWS「掘dayトーク」で集めた川や堀の記憶をもとに、今回のクリエイティブ・キャンプでは「これからの水遊び」を発見、それらをローカルツーリズムにつなげていこうという試みだ。

しかしプロジェクト実施に資金は不可欠だ。前田記念工学振興財団の地域工学分野の助成金を知った五三さんは、「これだ!」と思い、一晩で研究計画書を書き上げたそうだ。「この助成がなければプロジェクトは始まっていなかったかもしれない」と五三さんは振り返る。さらに、協力者なくして、プロジェクトを進めることはできない。インタビュー調査や「掘dayトーク」は、横山真平さん、北島智美さんから地域の関係者に支えられ、ローカル・インフラツーリズムの実験的な実践は、観光協会の氏家将利さん、西田美織さん、乗富鉄工所の乗富賢蔵さんらとの協働で進めてきた。

泥と掘床で川づかいを試す

WSの参加者の存在も大きい。今回のWSには地元で子どもたちに柳川をどう伝えるかを考えたいという小学校のPTA会長や、以前、五三さんの論文を読み、研究内容に興味を持ったという熊本大学の学生など、さまざまなバックグラウンドの方が参加し、多様なアイデアを提案した。それらは合宿をとおして、「泥遊び」と「掘床レース」に集約され、2日目に実践、公開討論会で遊びの提案が行われた。「泥」は以前からの漠然とした発想を具体化、堀や干潮の川から採取した泥を使い、柳川だんごを模した泥だんご、泥筆などを試した。地域関係者は日常的な存在で注目してこなかった泥に、「遊びの素材」としての期待を寄せた。



掘床はユニットをつなげると、大人15人が立って乗れるほど。

写真は掘床レース

一方、掘床は柳川市観光協会や乗富鉄工所などが協力して開発した、水上に浮かべて使う可動式の床で、新たな観光資源としての用途が模索されている。参加者は掘床をいかだのように漕ぎ、水上を移動する楽しさや、釣り場としての使用法などを提案した。

モヤモヤから発想を広げる

ゲスト講師からのアドバイスも参加者のアイデアを支えた。美術家の藤浩志さんと都市デザイナーの岡大輔さんは、完成形を先に決めるのではなく、目の前の素材やモヤモヤした状態から発想を広げるよう助言。そこから泥遊びをとおして人々が緩やかにつながる「コミュニケーションの場づくり」という方向性も見えてきた。

また地域プロデューサーの日野昌暢さんは公開討論会で、PRは単なる宣伝ではなく、Public Relationsすなわち「公共との新しい関係の結び直し」だと語った。PRは「同じ目標を目指す仲間をつくる技術」でもあるという日野さんのことばは、「仲間探しを大きな目標にしよう」と始まったクリエイティブ・キャンプの根幹にもつながるものだった。

泥遊びに興じる参加者と泥遊びの作品



種を未来へつなぐ

研究というと、形のある成果が求められがちだ。しかし五三さんは、プロジェクトを遂行するなかで、アカデミックと観光ビジネスの協調において、最初からゴールを観光プログラムの開発に定めると、うまくいかないと感じるようになった。これは他の関係者も同じ思いだった。そこでまず調査を積み上げ、その先に生まれる「種」を地域の人々と試していく「研究ドリブンのプロジェクト」に方向転換した。さらに、研究成果やWSで生まれた関係性を一過性で終わらせず、柳川で継続的に企画を生み出す母体として、自身が資金を投じ、任意団体「人と水の流域ラボ」を立ち上げた。今回のWSは同団体の企画第一弾でもある。こうした五三さんという研究者の存在は、地域の観光ビジネスに関わる人々の考えにも影響を与えている。

乗富さんは、五三さんとの対話を重ねるなかで、自社のブランディングから、水門を通じて柳川のまち全体をブランディングする視点へと考えが広がったと語る。観光協会の氏家さんも、五三さんの研究をとおして、従来の「うなぎと川下りだけ」と言われる柳川観光を、掘割を上位概念とする地域全体の価値づくりへ変えていけるのではないかと考えている。

2026年4月、五三さんは山梨大学に移り九州を離れた。しかし柳川でのプロジェクトは続く。10年後、30年後を見据え、関係者や参加者が「モヤモヤ」を楽しみ、「種」を見つけて育てる。今回の試みはその第一歩になったと言える。



<川づかい>クリエイティブ・キャンプ in 柳川 2026

川の新たな「使い方」を考える合宿式WSが「福岡県柳川市における水門を活用したローカル・インフラツーリズムの開発」プロジェクトの一環として開催された。

ワークショップ実施日：2026年5月16日(土)～17日(日)

場所：柳川市の水路（掘割）および沖端川周辺（福岡県）

参加者：九州や関東の大学生・若手社会人、柳川市民及び周辺地域のまちづくり実務家、プロジェクト関係者、ゲスト講師等21名、公開討論会には柳川市役所観光課職員等も参加

企画運営：人と水の流域ラボ、協力：柳川市観光協会、乗富鉄工所、柳川暮らしつく会、みすべデザイン室（現、古今と）

※本研究とワークショップは、**（公財）前田記念工学振興財団**の令和7年度研究助成（地域工学分野）を受けて実施されています。

※写真はすべてワークショップ参加者提供。